

尾崎三良と徳富蘇峰

会員 御手洗 一 函

私は調査と読書の間に、佐伯地方に關係あるものを、索引と作って整理しているが、その中から、現在に近い明治と大正時代とより上げて二題紹介したい。原文は日記の一節であるが、皆さんにはなつかしく懐古され、若い人には、佐伯を知る上に結構面白くて楽しい讀物になる。

（其の一）

尾崎三良自叙傳

（中巻より）

尾崎三良は明治政府の高官で、明治十八年三月十二日「御用有之九州各県、被差遣候事」の辭令をうけ、九州各県を巡回している。その目的は、国会開設に当り、「（鬼も命も、僻遠地の人民経済の情態を審査する必要あり）」としてゐる。

「六月一日 大分港より汽船三光丸に搭じ、臼杵・佐伯巡視の途に上る。三光丸は二百七十屯の小船なり。四時大分港を發し、佐賀ノ関に一泊。

翌二日午前三時同所を發し、臼杵、伊予の八幡浜及び宇和島等を経て、午後九時に佐伯着。臼杵より佐伯に至る陸路僅かに八里なれども峻険難路なり。故に旅客は皆海路に由る。海路僅かに十余里、速力遅き船下ても約三時間に至るべし。汽船は伊予回八幡浜、宇和島に寄港、四十五、六里の迂回なり。旅客皆不平を鳴ら

す。佐伯より巡查數名乗船へ迎へて来る。共に上陸、巡查先導にて、轍車凡そ三十軒にして船頭新瀨實依船長、警部来る。深更なるも皆務めて面会す。」

先ず且ご苦勞様と言いたい。臼杵から佐伯まで、八幡浜、宇和島と登って佐伯とは、旅客がどのように不平と並べたか想像に余りある。ただ明治の高官をもつてして、意の如くならなかつたらしい。貴重な一便だつたに違いない。してみると、定期船はいつごろから就航したのであるか。明治十八年の交通事情を知る上で、貴重な資料である。その頃、佐伯にはすでに入力車があつた。

「佐伯所は元毛利伊勢守高謙の領地にて、俗に矢筈毛利と云ひ祿二万石。小祿の割には士族多く、矢野文雄、藤田茂吉は佐伯藩士なり。郡長等の案内にて郡役所、治安裁判所、学校等巡視例の通り。佐伯地方に一種他と異なる風俗あり。二三男といへども養子にゆることも別家十ること多し。皆家に在つて各々妻を持ち子孫繁殖す。其代り巨主の権力は殆んど君主專制にして、他の家族は悉く奴僕なり。所謂家の子郎党なり。一家は其家族の労働より生ずる収入を以て家計と立つ。一年定日の休暇の外、一日も休むべからず。各自の食料、衣服は皆自弁なり。又各自休日及び夜業を以て私利の財産を作る。此習慣は蒲江村に今猶最も嚴重に行われ、其故が閩村人民の勉強耐忍、曾て他村の及ばざる所にして、各戸富饒なりと云ふ。」

旧藩士族及び明治に至つて旧藩士の時代は、佐伯毛利藩は通称矢筈毛利と呼ばれ、士族の多かつたことが指摘

されてゐる。これについては藩祖高政公と家臣団について、小論を書きたいが、高政が喬吉の近習として重宝される間、清正如止則らの武断派はすでに軍団を任せられ、石田三成ら文治派は能吏として才覚をあらわす。譜代の家臣をもたない高政は、その遅れをとり度すを、家臣をとり立て、独力で軍団を組織する。そのため、同胞の清正や正則は正敵する家臣を集めようとした伝統的立場のものである。ただし徳川泰平はその必要がなかったため、名残りとして小祿の割に家臣が多くなった。

当時矢野龍溪、幕田茂吉は中央で著名であり、その意味で豊後佐伯藩は知らぬ者がなかった。

藩主に代表される封建制度の風俗は、誰の報告によるものか興味ある一文である。そう言われれば、之父の生きた方についてそのようを気もするが、民俗学から歴史を研究する一つの視点になる。在方と浦方の比較についても研究課題の一つであらう。

一佐伯は三四日の両日滞在の間所々見物、揮毫、接客等に忙しく、四日に佐伯を辞し大分に帰らんとするも洗船の便に三日なすと云ふ。乃ち小舟一隻をせと佐伯番五川より川口に下り、所々逆檢して大分に帰らんとす。舟子三人順風は逢へば帆を揚げ、既便ならざれば三人間所なく櫂櫂を盡し、従者三名、差官一名、或は官吏の従ふこともあり、予と共に五六名なり。津井村を経て細代村に達す。同村佐長坂本富次方に投宿。

(注) 津井村から臼杵、大分に向かう途中に細代浦と

いうのはない。恐らく細代浦のことだろう。

五日に細代を發し元の小舟に駕す。然れども此度は舟子四人にて間所なく櫂を盡す。二小岬を迂回して臼杵に達す。凡そ五時間を要す。(以下略)

尾崎三良の揮毫が、佐伯のどこかに残存しているかもしれない。また当時の船便の様子がよくわかる。洗船は細島と別府、あるいは大坂行きと何かが本で読んだことがあるが、正しい分間があった事と思う。船頭所を察して細代に泊り、五時間後臼杵着。

(其の二)

烟霞勝遊記 徳富猪一郎著

(上巻より)

これは、蒲生方おなじみの蘇峰学人の、九州遊記の中の一節であるが、当今、蘇峰翁の著書も春開容易に燃し得なくなつたので、あえて資料として書きとめることにした。

一臼杵からは殊々隧道多し。但だ山間に天然の紫藤花、今も満開。山腹随処、柑橘類を植う。夏蜜柑累累として正に熟す。洞門を出入れば、小湾に坐して、小湾を過ぐれば、洞門に入る。

佐伯にては、小田部所長、其他多数有志の方々に伴われ、直ちに常盤旅館に入る。豫て尾崎君よりの打合せありたる由にて、已に投網船の準備出来たりとの事をれば、午餐を著を授けて赴く。

まずは簡潔にして名調子の文章である。

小田部所長。なつかしい名前には憶えるが、記憶にない。何しろ、その学人日記、大正十一年四月二十六日午前六時半と奥書にあり、小生残念ながらまだこの世に在らず。投網船とは又風流にして、最上の馳走なるも果た

疾之力にて十六七枚と書せり。斯くて毛利家の墳墓、及び秋月橋頭翁の碑を採して歸りぬ。

蘇峰翁、廟が佐伯の美味を食し過ぎたか。

養賢寺は佐伯の舊る寺、鼎州和尚の話も充分聞いていゝ。暮未から明治の維新が起つたに違いない。何しろ養賢は佐伯の近世史が要約されている。三百年の歴史の大要を考ふる時は、鞍山に登って望観し、個々の事象は、養賢寺の山門をくぐり、歴代毛利公の菩提を弔うがよい。何か教えられる所がある。

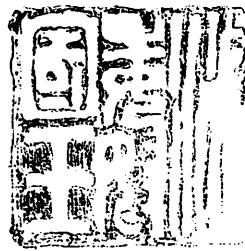
「午後一時半、停車場に向ふ。小田部町長、其他有志相送る。佐伯に於ける有志諸君の厚意、謝す可き也。此からの洗車は玩具同様の小汽車也。ス々にして三十年前の旧式汽車に乗る。気分勝れず、腰を曲げて車上は臥す。線路は禿して溪谷の間をよる。一時間足らずして、重河に至れば、渡辺氏三郎辰、及び杉山宮崎県知事の代表諸君の必迎あり。此より自動車にて延岡に赴く。時に三時半頃にてありき」

「停車場」がなつかしい。当時大正十一年、蘇峰の見た日豊線(豊州線)は、三十年前の小汽車であつた。蘇峰のいう三十年前とは、明治二十五年頃である。どの程度の小汽車か、古よつと想像もしにくい。重岡から日向へ通じる日豊線は、確か開通が大正十二年であつたから、余程小型だつたに違いない。

「豫て此間の道路の險悪を聞き、且つ前日の暴風雨の爲めに、道路破損し、不通の評判さへ聞き居たれば、予等は憚々乎として、佐伯を發したり。然るに米りて見れば、謂い左程でなし。併し流石に、萬層の山腹中

を縫うて行く險路にして、且つ鐵道道路の工事敷中なれば、その爲に故らに破壊せられたる形跡少からず。何れにしても、機械体擦のやりのつづ也。途中甚花濤瀾、溪水而後、構はらず、尚環を湛ふ。而して激して湍となり、掛りて瀑布となる。亦た奇觀ならずとせず。途中下車の己お可からざるは、宗太郎峠と北川橋のみ」

景色はよかつたが、日向越えは難所であつたに違いない。当時鐵道工事中で、又宗太郎峠は車を降りている。道路工事の中、当時の自動車では馬力不足であつたのか明瞭でないが、大正十一年頃の開通状況が彷彿とする。種々の進歩が早過ぎるのか。六十年の歳月が早過ぎるのか、すでにこの日記も史料の仲間入りとすつたある。(以上)



志賀島の金印捺痕

此は先年九州研修旅行の際買つた金印の印影の模写、めんどうくさくなつたので、不完へはなすまじやめたもの。(本物はこれより小さい)

極したというのがうれしい。なぜか知らぬ

無学の者でも古い歴史にあづかる機会が亦たえられる。郷土の歴史も、広い世界史の発展性をもつていゝ。従つて、朝鮮史や中国史の勉強が必要といふことと教へた。

(これは埋め草まがらもの)